

公開シンポジウム

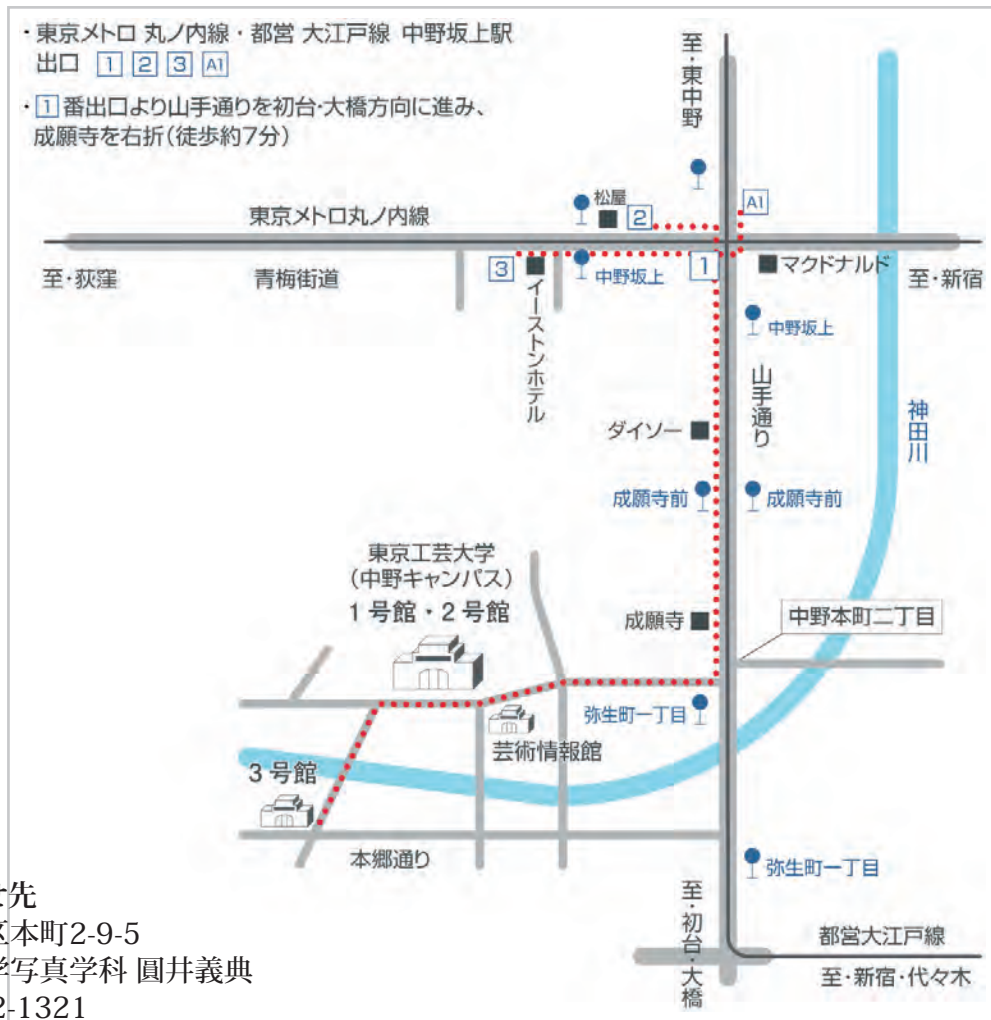
写真×哲学

2016年7月2日(土)

15:00～18:00 (開場 14:30) 時間内出入り自由、参加無料

東京工芸大学中野キャンパス1号館1101教室

東京工芸大学写真学科 / 上智大学メディア・ジャーナリズム研究所 共催



お問い合わせ先
東京都中野区本町2-9-5
東京工芸大学写真学科 圓井義典
Tel: 03-3372-1321

2016年7月2日（土）、東京工芸大学にて、東京工芸大学写真学科と上智大学メディア・ジャーナリズム研究所の共催シンポジウム「写真 × 哲学」を開催します。

本企画は、東京工芸大学写真学科の教員や在学生、卒業生と、（主として上智大学の）哲学を専攻する研究者や学生が集い、写真というメディアを介して、協創的に哲学する試みです。

昨年11月より、ヴァルター・ベンヤミン著「複製技術の時代における芸術作品」を精読することで写真についての理解を深めつつ、「写真とは何か」、「写真家とはどのような存在か」といった、さまざまな問いについて議論してきました。写真側メンバーにとっては、哲学側メンバーと議論するなかで、写真術には還元されない哲学的問題や、写真家としての自らのあり方を内省する機会となりました。哲学側メンバーは、専門外の「写真」というテーマについて異分野の人々と議論することを通して、かえって「哲学とは何か」についての気づきを獲得しています。今年の3月には、参加者それぞれが、写真作品とそれに関するテキストを匿名で創作し議論する実験的試みも開催しました。写真とテキストだけを頼りに写真側 / 哲学側メンバーの特徴を判別できるか検証するとともに、それぞれの固有性を探究しました。

公開シンポジウムでは、これら一連の試みを来場者のみなさまと共有し、写真と哲学の将来について考えます。写真家は、写真の歴史や風習にしたがってイメージを操作し、意図するメッセージを視覚的に伝達するだけでなく、自らの創作活動そのものについて考え、異分野の第三者とも対話可能な言葉をもって発言していくべきではないのか、そのための思索と教育の方法にはいかなる方法がありうるのか。また、人文学部の存続が危ぶまれるなか、哲学の意義はどこにあるのか、哲学者は、哲学者同士でテキストを読み対話するだけでなく、自らの感性も使い、異分野の専門家に学びながら哲学する方法や教育の場を創っていくべきではないのか。当日は、会場に展示された写真やテキストの鑑賞と議論を通して、これらの問いに応答するようなコミュニティを実現したいと考えております。

企画・運営者

圓井義典(東京工芸大学写真学科准教授・写真家)

川島崇志(東京工芸大学写真学科前助手・写真家)

吉田幸司(日本学術振興会特別研究員PD・哲学者)

柴野京子(上智大学メディア・ジャーナリズム研究所・上智大学文学部新聞学科准教授)

高田怜美, 今成鈴香, 今井祐里, 堀越耀介, 斉藤音夢, 出原麻里子,

篠田優, 杉田聡美, 菅泉亜沙子, 岡本創, 桑原仁太